



Title	居住不安定者の支援関係のグループ・ダイナミックス：ホームレス自立支援法をめぐる支援に関する実践的研究
Author(s)	堀江, 尚子
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58489
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【1】

氏 名	堀 江 尚 子
博士の専攻分野の名称	博 士（人間科学）
学 位 記 番 号	第 2 4 1 5 7 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 22 年 9 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学 位 論 文 名	居住不安定者の支援関係のグループ・ダイナミックス-ホームレス自立支援法をめぐる支援に関する実践的研究-
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 渥 美 公 秀 （副査） 教 授 堤 修 三 教 授 水 内 俊 雄

論 文 内 容 の 要 旨

1990年以降、ホームレス問題は社会問題として注目され始め、2002年ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法(以下、ホームレス自立支援法記す)が制定され、支援体制も整いつつある。しかし、支援関係の崩壊という事態も発生している。

本研究では、支援関係の崩壊に至るダイナミックスの解明と、継続的な支援関係の可能性について自立支援センターおよび更生施設におけるフィールドワークをもとに、グループ・ダイナミックスの観点から考察した。フィールドワークは2005年10月から2007年9月まで自立支援センターで、2007年9月から2009年10月まで更生施設で行った。その結果、支援関係の崩壊のダイナミックスは、支援する側の問題と支援される側の問題というよりも、支援関係の非対称性が非対等性に変移することの動態として捕えられることが明らかとなった。従って、継続的な支援関係は、非対等な関係を回避することによって拓かれると考えられ、非対等な関係の前段としての非対称な関係に変化をもたせる実践を行い、3つの方略として捉え返した。以下に各章の要約を示す。

第1章では、居住不安定者に象徴されるホームレスと本研究の対象について議論をおこなった。これまでのホームレス研究を概観し、欧米ではホームレスを広義に定義していることを確認した。先行研究ではホームレスの原因として、個人的な要因と社会的な要因があった。前者には精神疾患、アルコール問題などがあり、後者には貧困、社会構造の変化、現代社会問題などがあった。より近年には原因は一つの決定的な要因ではなく、複合的なものと捉えることが妥当とされている。欧米は広義の定義を採用しているが、日本ではホームレス自立支援法によって狭義の定義を採用した。そして、日本のホームレス問題の特異性を確認した。本研究では、ホームレス支援法の対象となって、実際に支援を受ける人びとを対象とすることを明示し、広義狭義のホームレスと区別するために、「居住不安定者」という語を用いることを述べた。

第2章では研究の視座として、支援についての先行研究を概観し、依拠する研究の枠組みであるグループ・ダイナミックスについて論じたのち研究の目的と方法について述べた。研究の目的は二つあり、一つは居住不安定者をめぐる支援関係の崩壊に至るダイナミックスの解明であり、もう一つは、継続的な支援関係の可能性の実践的検討であることを示した。研究の方法はフィールドワークを中心にして研究を進めるもので、インタビュー調査、二次データ分析、アクションリサーチなど、多様な手法を用いたことを示した。

第3章では、居住不安定者の支援策として施設収容を第一義とする大阪市の社会福祉の状況を確認し、日本最大の寄せ場である釜ヶ崎で機能したあいりん体制が崩壊を迎えた時点にホームレス自立支援法が成立した意義と、

居住不安定者への現状及び支援策と中間施設の課題について述べた。

第4章は、支援関係の喪失というダイナミックスを考察することを基軸とした3つの研究からなる。4-1「ホームレス自立支援センター入所者の現状と問題―排除/包摂のダイナミックス―」では、支援関係における支援される側の生活世界に注目して、自立支援センターで提供される支援の機能を検討した。排除と包摂の概念を用い、自立支援センター内外へのシステムの複数化による対応を提案した。4-2「自立支援センター職員の規範―利用者とどう向き合うか」では、自立支援センターにおける支援する側である施設職員が支援対象者とのように向き合っているのかを職員の規範を基に検討した。「職員は入所者の利益のために努めるものである」と「職員は支援対象者の攻撃性に配慮すべきである」という二つの規範が存在した。支援者が支援対象を「自分かもしれない」と捉えるなら、継続的な関係に拓かれると結論付けた。4-3「自立支援センター退所者の語り - なぜ彼は失踪したのか?」では、支援対象の失踪事例をもとに、異なる時間的視点、関係的視点からの分析を通して、再野宿者の回避に貢献できる自立支援センターの可能な取り組みを示した。ナラティブ・アプローチの視点から当事者の物語を検討し、訪問員である聴き手と当事者との間で、共有する規範を前提に物語は構成されているのを確認した。

第5章は、関係の継続性を考察した3つの研究であった。5-1「大阪市更生施設を拠点とした 関係の継続」では、Y寮の利用者変容を分析し現状を示した。施設は地域との良好な関係の形成過程で、副次的に退所者のアフターケアの機能を向上させる協働の実践をおこなっていた。関係の形成に必要な視点は、二つの集合体を俯瞰する内でもあり外でもある視点であった。5-2「コミュニティ・カフェー集いの場での現象」では、施設が中心となって運営する地域交流の場であるコミュニティ・カフェを取り上げ、その集合性を分析し、カフェという場所の原理が市場原理に拮抗するものとして、人びとに意味を与えていることを論じた。支援関係の積極的な展開にこの反市場原理である場所の原理を導入することの可能性が見出された。5-3「芋プロジェクト-場所を拠点として関係の創造」では、人と人との関係の創造を目指し、畑という場所の原理が機能する場をしつらえアクションリサーチを実施した。戦略的なアクションリサーチが、関係の創造に貢献することを論じた。関係の再構築は実現し、共同体のネットワークの中では、既存の支援関係は支援する側とされる側の位置が入れ替わっていた。支援を能動的に展開するために関係が置かれた文脈を変えたことによって、既存の関係の逆転が新たな関係を生み出すことを示した。

第6章は総合論議であり、居住不安定者の支援関係についての問題と展望を議論した。本研究で明らかにできたことは、居住不安定者をめぐる支援関係の崩壊のダイナミックスと、実践的な継続的な支援関係への手掛かりである。支援関係の崩壊のダイナミックスは、支援する側の問題と支援される側の問題に加え、支援関係の非対称性が非対等性に変移することで生じていた。そして、継続的な支援関係の非対等を回避する方略として、支援関係を地域を含むより広い文脈へと移す実践をおこなった。居住不安定者に関わる問題を個人だけを捉えるのではなく、個人を取り巻く関係を総体と捉え、支援関係を研究の中心にした本研究で明らかにできたことは多い。しかしながら、本研究で明らかにできなかったこともまた多くあり、居住不安定者の当事者性を高めること、また当事者性の欠如の一因である一般社会の規範の内在化の考察、社会保障の問題、生産の分配の問題なども議論に焦点を当てることはできなかった。以上のような限界を踏まえつつ、本研究で見だした拓かれた関係について展望すると、支援関係が存在する施設という文脈を他へ置き換えることによって、非対等な関係を回避し、新たな関係を構築することが可能となる。具体的には、地域社会を他の文脈として採用した。そのことのよって支援される側の生活世界は変化した。施設の地域の関係は継続的な働きかけによって発展したものであった。今後は、こうした積み重ねのある地域でのさらなる新たな関係の創出、また、積み重ねのない地域での実践へと展開していきたい。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、支援関係の崩壊に至るダイナミックスの解明と、継続的な支援関係の可能性について自立支援センターおよび更生施設におけるフィールドワークをもとに、グループ・ダイナミックスの観点から考察したものであった。期間は、2005年10月から2007年9月までは自立支援センターで、2007年9月から2009年10月までは更生施設である。その結果、支援関係の崩壊のダイナミックスは、支援する側の問題と支援される側の問題というよりも、支援関係の非対称性が非対等

性に変移することの動態として捉えられることが明らかとなった。従って、継続的な支援関係は、非対等な関係を回避することによって拓かれると考えられ、非対等な関係の前段としての非対称な関係に変化をもたせる実践を行い、3つの方略として捉え返している。

各章の構成は以下の通りである。第1章では、居住不安定者に象徴されるホームレスと本研究の対象について議論をおこなっている。これまでのホームレス研究を概観し、欧米ではホームレスを広義に定義していることを確認している。本論文では、ホームレス支援法の下、実際に支援を受ける人びとを対象とすることを明示し、広義狭義のホームレスと区別するために、「居住不安定者」という語を用いている。第2章では研究の視座として、支援についての先行研究を概観し、依拠する研究の枠組みであるグループ・ダイナミックスについて論じている。第3章では、施設が存在する大阪市の状況に触れている。居住不安定者の支援策として施設収容を第一義とする大阪市の社会福祉の状況を確認し、ホームレス自立支援法が成立した意義と、居住不安定者への現状及び支援策と中間施設の課題について述べている。第4章は、支援関係の喪失というダイナミックスを考察することを基軸とした3つの実践的研究からなる。4・1「ホームレス自立支援センター入所者の現状と問題―排除/包摂のダイナミックス―」4・2「自立支援センター職員の規範―利用者とうき合うか」4・3「自立支援センター退所者の語り－なぜ彼は失踪したのか？」の3つである。第5章は、関係の継続性を考察した3つの実践的研究である。5・1「大阪市更生施設を拠点とした 関係の継続」5・2「コミュニティ・カフェー集いの場での現象」5・3「芋プロジェクト―場所を拠点として関係の創造」の3つである。第6章は支援関係の総合論議と展望である。本研究で明らかにされたことは、居住不安定者をめぐる支援関係の崩壊のダイナミックスと、継続的な支援関係への手掛かりである。支援関係の崩壊のダイナミックスは、支援する側の問題と支援される側の問題に加え、支援関係の非対称性が非対等性に変移することで生じていたとされている。そして、継続的な支援関係の非対等を回避する方略として、支援関係を地域を含むより広い文脈へと移す実践をおこなっている。具体的には、地域社会を他の文脈として採用している。そのことのよって支援される側の生活世界は変化した。

本論文の高く評価できる点は、地道なフィールドワークによって居住不安定者の支援関係の崩壊のダイナミックスを明らかにしたこと、それらを理論的に整理し、支援関係の継続性に関する実践的な方略を示したことである。これらは、今後も対応が迫られる居住不安定者の支援に新たな可能性をもたらすものである。以上より、本論文は博士（人間科学）の学位の授与に十分値するものであると判定された。